

鈔の『滿洲實錄』と深いかかわりをもつことも判明した。

契丹・女眞文字考

田村 實造

契丹文字に大字と小字とがあることは『遼史』その他の記載によって知られるものの、つい半世紀前までは、それがどのような字形のものかさえ明らかでなく、いわゆる「幻の文字」といわれていたが、昭和七年「慶陵」から契丹文哀册碑石が出土するに及んで、ようやく確認されるようになった。爾來、日本・中國をはじめ各國の東洋史家や言語學者によって、この文字解讀への努力がかさねられてきたが、未だ誰人も解讀に成功したことをきかない。

女眞文字にも大字・小字の二種があり、『金史』などによると「契丹文字の制度に倣まねって作られた」とあるから、契丹・女眞兩文字は姉妹關係にあるといえよう。幸に女眞文字に關して、「大金得勝陀の頌碑」・「女眞進士の題名碑」をはじめ數基の金石文が存し、また文書の類にも明代の『女眞館譯語』などがあつて、その資料はかなり豊富だといえる。そのため女眞文字の解讀は、契丹文字に比べてはるかに進んではいるが、しかしこの文字についても未だ十全に解讀されたとはいひ難い。それに、これまで知られた資料はすべて女眞小字だと考えられており、大字については全く知られるところがない。

このような契丹・女眞文字の研究の現状をふまえて、兩文字の形態・音價・構造を考へつつ解讀へのささやかな試みを披露してみた。